

【問題一】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

1920年代も終わりに近づいた昭和の初期に、日本の聴衆の前で初めて歌われたシャンソンという音楽は、太平洋戦争による足踏みはあったものの順調に発展し、約30年後の昭和30年代に入る頃にはブーム期が訪れ、日本のポピュラー音楽を牽引する音楽のひとつになった。しかしその後は種々の競合する音楽とのせめぎ合いもあり、そのブームも徐々にチン静化していった。

日本経済がまだバブル景気のピークで絶好調だった1990(平成2)年、日本のシャンソン・ファンから、聖地のように崇められていた東京・銀座のシャンソン喫茶「銀巴里」が、惜しまれつつ半世紀近く歴史にピリオドを打った。それは日本のシャンソンの退潮を象徴する出来事だった。今は銀座7丁目に、「元 銀巴里跡」の石碑が寂しく残る。

シャンソンはどこへ行ってもなくなったのだろうか。これからも日本に戻ってくることはないのだろうか。我々日本人のシャンソンとの付き合い方に何か問題があったのだろうか。そのところを少し考えてみたい。

長らく表舞台に出ることがなかった日本のシャンソンに、久しぶりに晴れの舞台が訪れた。2021(令和3)年8月8日、東京オリンピックの閉会式でのことだ。そこでシャンソンの名曲、「愛の讃歌」が歌われた。歌ったのは東京出身の日本人歌手Mitsui(ミツイ)だった。彼女はエディット・ピアフが作詞したオリジナルのフランス語の歌詞と、岩谷時子が訳詞して越路吹雪が歌った日本語の歌詞の両方で歌った。この年、東京で新型コロナウイルスの蔓延のなかでカン行されたオリンピックが、次回2024年の開催地パリでは、平穩に開催されることへの祈りを込めて歌われたのである。

この歌が歌われるシーンは世界中の人々がテレビで視聴したが(残念ながら閉会式は無観客で行われたので)、感動を覚えた人も少なくなかったことだろう。生前の越路吹雪を知る日本のシニアの人々には、若き日に耳にした越路の名唱がよみがえり、当時に立ち帰る思いを持った人も少なくなかったはずだ。シャンソンもいなくなった若い人もいたかもしれない。

しかし長くシャンソンを聴いてきたシャンソン・ファンにとっては、何とも物足りない「愛の讃歌」であった。どんなに短くても3分半はかかるこの曲が、約2分に短縮された。前半のAメロ提示部は一部省略、後半のBメロ(サビの部分)は全部省略という有様だった。ショー全体での時間の制約があるにせよ、それは「よ」とつぶやいたシャンソン・ファンもいたことだろう。

もうひとつ気になったことは、フランス語と日本語のどちらも理解できる人は、このときに歌われた前半と後半の歌詞のトーンの違いに違和感を覚えたのではないかと。前半の岩谷時子の日本語訳詞は純粋で甘い愛の歌だが、後半のフランス語の原詩ではそれが深刻で激しい愛の歌になっている。それをひとつの歌手がひとつの歌として歌ったのだから。

だからといって、この歌唱が東京からパリへと引き継がれるオリンピックの閉会式にふさわしくなかったと言いつもりはない。久しぶりに訪れたシャンソンの名曲の晴れ舞台を素直に喜ぶべきだろう。このような大舞台で、日本のシャンソンの絶頂期の歌ともいえる「愛の讃歌」を歌ったのが若いシンガー・ソングライターだったことは、日本のシャンソンの現状を反映しているといえるだろう。

日本でのこの歌の創唱者ともいえる越路吹雪もすでに亡く、深緑夏代、中原美紗緒、岸洋子らのベテラン歌手たちも皆この世を去った。しかし残念ながらシャンソン専門の若い歌手は育っていない。そのためこのような役割は、シャンソンのスペシャリストではなく、今回のように幅広い分野の歌に挑戦している歌手のなかから、シャンソンを歌える歌手が選ばれることになったのだから。

このようなことは昨今のシャンソンのコンサートでは起こりがちなことである。毎年恒例の日本のシャンソンの祭典、「パリ祭」でもこれに似似していることが見られる。

このところ「パリ祭」のコンサートメインの出演者となっているのは、美川憲一、前田美波里、おむね鳳蘭、高畑淳子、ROLLYなどの顔ぶれで、普段からシャンソン歌手と呼ばれている人々ではない。これらの歌手が、「パリ祭」ではシャンソンを歌っている。2021(令和3)年の「パリ祭」でゲスト歌手として出演し、「ドミノ」と「バラ色の人生」を歌って評判がよかった藤あや子も、演歌歌手ではあるがシャンソンも歌う、レパートリーの広い歌手だ。

今や日本でも数少なくなったシャンソンの祭典Ⅱ「パリ祭」のステージに、シャンソンのスペシャリストの歌手がほとんどいない。それは現在のシャンソンの不振を如実に示しているのではないかと。 「パリ祭」の主催者は毎年若手のシャンソンの新人歌手を発掘するためのコンテストも行っている。その他にも同様のコンテストが行われている。しかし、残念ながらそこからも現歌手が出てこないのが現状だ。もうシャンソンのスペシャリストは育たないのだろうか。

シャンソンを歌うことの難しさについて、美輪明宏は自著『紫の履歴書』のなかでつぎのように指摘する。

シャンソンは、c中のc。フランス歌曲の発声に、発音、囁き、語り、絶叫、メロディックな唱法、また、リズムも、ワルツ、タンゴ、

一人前のシャンソン歌手になるにはこれら乗り越えなければならぬ。新人歌手にとっては容易なことではない。「パリ祭」のイベントに大勢の歌手が出演するのも、それぞれが自分の得意な曲を、数曲歌えばよいということが許されるからかもしれない。ましてひとり歌うワンマン・コンサートやリサイタルで、シャンソンだけを20曲以上も歌うことは大変なことだ。なかなか本格的なシャンソン歌手が生まれないのも、わかるような気がする。

日本のシャンソン歌手にとって、フランス語でシャンソンを歌うためにフランス語を正しく発音し発声するのは、必要不可欠なことだ。今もシャンソン歌手を目指すならば誰もが、フランス語を習得する努力を続けていることだろう。そのためにフランスに留学する者も少なくないはずだ。

しかしそのような努力があっても、残念ながら日本人がネイティブのフランス人のレベルまでのフランス語を習得することは容易ではない。それはフランス語を習得しようとするものなら誰もが感じてはいるはずだ。

さらにもし日本人歌手が完璧なフランス語でシャンソンを歌ったとしても、それを日本の聴衆、日本のシャンソン・ファンが、受け止めることができるかどうかという問題もある。それは歌手がフランス語でシャンソンを歌うことよりも、さらに難しいことだろう。

このようなことも日本人歌手がシャンソンを歌う場合に、日本語に訳して歌われることが多くなった大きな要因ではないだろうか。それは日本で初めてシャンソンがステージで歌われた、昭和初期の宝塚少女歌劇団の公演から早くも始まった。日本語で歌われるシャンソンはストリートに日本人の心に訴えかけてくる。

それからの日本のシャンソンは、フランス生まれの魅力あふれるメロディに、同じくフランス生まれの心を打つ原詩をもとにして作られた日本語の歌詞を載せた、日本独自のスタイルのシャンソンとなり、発展していくことになった。それは、なかにし礼が、喫茶店「ジロー」で初めて日本人歌手の歌うシャンソンを聴いたときには、すでに始まっていた。

もちろん日本におけるシャンソンは、日本人歌手による日本語のシャンソンだけが発展したわけではない。フランスの歌手によるフランス語のオリジナルのシャンソンを聴くファンも早い時期からいたことは確かである。それはフランスからの輸入レコード、あるいは輸入原盤の日本プレスによるレコード、つまり日本のレコード会社が発売する『洋楽レコード』で楽しむ、あるいはそれがラジオで流れるのを楽しむという、コアなシャンソン・ファンである。またフランスからのアーティストの来日コンサートには、本場のフランス語のシャンソンを聴くために、普段は日本語のシャンソンを聴くファンが詰めかけたことも確かである。

だが戦後になって日本のシャンソン・ブームが訪れたときには、その中心にあつたのは、やはり日本人が歌う日本語のシャンソンであった。日本のシャンソンは日本語のシャンソンを愛する人々によって支えられていた。彼らはフランス語ではなく日本語のシャンソンを楽しんだ。

ところで日本語で歌われるシャンソンは、本当にオリジナルのフランスのシャンソンの歌詞を忠実に日本語に置き換えたものなのだろうか。それは必ずしもそうとは言いつれない。確かに初期の作品では歌詞は忠実に『翻訳』されていた。しかし日本のシャンソンが成熟するにつれて、『訳詞』や『意識』あるいは『作詞』までされるケースも多くなった。岩谷時子訳詞の『愛の讃歌』はそのような『作詞』に近い、『訳詞』の例である。

このような日本語の歌をシャンソンと呼んでよかったのだろうか。それらはフランス製のシャンソンのメロディを使って、そこに日本の作詞家が日本語の歌詞を書き、それを日本の歌手が歌うという、シャンソンとは似て非なるポピュラー・ソングではないのだろうか。

日本語で歌われるようになったシャンソンが、日本でブームと呼ばれるような状態にまで発展していくにつれて、日本の歌謡曲がシャンソンに影響されるという傾向が起り始めた。そのためにいつのまにかシャンソンと日本の歌謡曲の、音楽としての境界線がはっきりしなくなるという現象が起こった。

このようなシャンソンと日本の歌謡曲のユ合傾向は、じつは日本でまだシャンソンが元氣だった頃から、すでに見られたことである。その時代、すなわちテレビの初期の時代の音楽番組のなかに、それがよくわかる番組がある。

1961(昭和36)年4月にNHKテレビの音楽バラエティ「夢であいましょう」がスタートした。この番組では中村八大(作曲)と永六輔(作詞)による作品が、今月の歌として毎月発表され、その多くがヒットしたが、ほとんどの曲は日本製のシャンソンともいえる曲だった。シャンソンに限りなく近い歌謡曲だったといつてもよいかもしれない。中村八大はジャズだけではなく、シャンソンにも並々ならぬ興味を持ち、銀座の「銀巴里」の常連としても通いつめ、シャンソンを深く愛する作曲家だった。

彼は番組のテーマ曲の「夢であいましょう」(歌・坂本スミ子)をはじめ、「遠くへ行きたい」(歌・ジェリー藤尾)、「おさななじみ」(歌・デューク・エイセス)、「故郷のように」(歌・西田佐知子)、「こんにちは赤ちゃん」(歌・梓みちよ)などのヒット曲を次々に世に送り出したが、それらはどれもシャンソンのエッセンスに満ちていた。

このなかの、「遠くへ行きたい」「こんにちは赤ちゃん」は、シャンソンとしてフランスでもレコードが発売された。番組テーマ曲の「夢であいましょう」はミューゼットとして、フランス人歌手によりアコーディオンの伴奏で録音されている。

「夢であいましょう」のようなテレビ番組が生まれたのは、日本の歌謡曲が発展を始めた時期である。この時期にはシャンソンだけではなく、アメリカン・ポップス、ブリテイッシュ・ロック、フォーク、ジャズ、ラテン音楽など海外のポピュラー音楽が日本の歌謡曲にも盛んに取り入れられて、和製ポップスと呼ばれる音楽が生まれ、もてはやされるようになっていた。

さらに時代が進むと、ニューミュージック、シティポップ、J-POPなどの新たな音楽の流れも起こったが、これらの流れのなかでも、シャンソンは他の欧米の国々の音楽と並んで、強い影響力を持つようになっていた。

しかしそのように日本の歌謡曲に影響を与えるいつぼうで、シャンソンという音楽そのものは、歌われること、聴かれることが、徐々に少なくなっていくた。それは日本の歌謡曲がシャンソンの影響を受けるといふ受け身の状態ではなく、逆にシャンソンを飲み込んで、自らの音楽に取り入れるようになったからではないか。結果としてシャンソン・ファンもそれに気がつき、歌謡曲に惹きつけられるようになって、シャンソン離れが起こったのではないかと、いうことだ。言い換えれば、それはシャンソン・ファンが日本の歌謡曲に、シャンソンの匂いを強く感じるようになったということでもある。「夢であいましょう」を聴いた多くのシャンソン・ファンも、そのことを意識していたか無意識だったかは別にして、感じ取っていたのではないか。

原語で歌うか日本語で歌うか、あるいは原語で聴くか日本語で聴くのか、という問題は、シャンソンに限らず、外国で生まれた歌を、日本人歌手が歌うとき、あるいは日本の音楽ファンがそれを聴くとき、どうしても選択しなければならないことである。どちらを選ぶかはなかなか難しい。d それによかったのだろうか。

生明俊雄、シャンソンと日本人、集英社

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|---------|------|------|------|------|
| (1) チン静 | ① 珍妙 | ② 駄賃 | ③ 陳腐 | ④ 消沈 |
| (2) カン行 | ① 果敢 | ② 観察 | ③ 所感 | ④ 発汗 |
| (3) ルイ似 | ① 係累 | ② 親類 | ③ 落涙 | ④ 本塁 |
| (4) 要イン | ① 因縁 | ② 陰湿 | ③ 隠居 | ④ 韻律 |
| (5) ユウ合 | ① 有休 | ② 猶予 | ③ 憂愁 | ④ 融点 |

問二 傍線部A「日本のシャンソンの退潮を象徴する出来事」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① シャンソンという音楽の人氣が、日本のポピュラー音楽の人氣に取って代わられてしまったこと。
- ② 東京の銀座にあった老舗のシャンソン喫茶が、客足が鈍ったことにより閉店してしまったこと。
- ③ 日本経済におけるバブル景気が破綻し、人々にシャンソンという音楽を聴く余裕がなくなってしまったこと。
- ④ 太平洋戦争への反省から、人々がシャンソンという音楽を積極的に受容することを控えてしまったこと。

問三 傍線部B「平穩に開催されることへの祈り」を説明したものととして不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 二〇二〇年開催予定だった東京オリンピックが翌年に延期された背景となった、新型コロナウイルスの世界的な蔓延による人々に対する行動制限のような不測の事態がパリオリンピックで発生しないことを願うこと。
- ② パリでのオリンピックが、計画通りの日程でつつがなく実施され、開会式、競技、閉会式等、関連する行事のすべてが、観客を会場に入れて、東京オリンピックよりも前のような形で行われることを願うこと。
- ③ オリピックの会場に集う競技者や観客が、パリオリンピックを狙って企図されるテロや不慮の事故等に巻き込まれて、大きな怪我をしたり、命を失ったりするような事態が起きないことを願うこと。
- ④ パリオリンピックの期間中には、現在、世界の中で起きている国家間の紛争や対立する問題を一時的に停止してもらって、国際的な平和の祭典としてそれぞれの国々が団結して参加することを願うこと。

問四 傍線部C「日本のシャンソンの現状を反映している」を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 日本のシャンソンを支えてきたベテランに変わる新たな若手のシャンソン歌手が育たず、シャンソン以外を専門として、幅広い分野の歌に挑戦している歌手が、シャンソンを歌える歌手としてシャンソンを歌うことが現在では既成事実となってしまうこと。
- ② 日本のシャンソンは、これまでシャンソンを歌うことを専門とする先駆者やベテランらによって、その命脈を保ってきたが、本来フランス語で歌われるシャンソンの世代を超えた継承は難しく、歌手の中で歌唱力の高い歌手たちが仕方がなく歌ってしまっていること。
- ③ 先駆者やベテランといわれた日本のシャンソン歌手は、フランス語で流暢にシャンソンを歌うことができたため、本物のシャンソン歌手として日本の愛好家たちからは受け入れられていたが、今のシャンソン歌手は語学の点で他領域の歌手たちに遅れをとってしまっていること。
- ④ 先駆者やベテランと言われる歌手たちがフランスの歌謡界への否定的な評価からシャンソンを歌わなくなり、若手のシャンソン歌手もそれに追隨してしまったために、シャンソンを歌える他領域の歌手が日本のシャンソンを支えなければならなくなってしまっていること。

問五 空欄 a 〃 c に当てはまる最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|------|----------|-----------|-----------|---------|
| 空欄 a | ① 物語っている | ② 神がかっている | ③ あざ笑っている | ④ 司っている |
| 空欄 b | ① 蝸牛 | ② 頭角 | ③ 牛頭 | ④ 鋭角 |
| 空欄 c | ① 世話物 | ② 生物 | ③ 季節物 | ④ 雑物 |

問六 傍線部D「日本の聴衆、日本のシャンソン・ファンが、受け止めることができるかどうかという問題」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① フランス語を日本人がネイティブのレベルまで習得することは困難であり、フランス人のようには歌えないという問題。
- ② 多くの日本人は日本語が世界で一番優れた言語であるという自負を持っており、他の言語には興味を示さないという問題。
- ③ 日本人は外国語を理解するのが苦手なため、フランス語で歌われるシャンソンを積極的に聞くことができないという問題。
- ④ 母国語の日本語で歌われていないため、その歌自体が日本人の心に素直に訴えかけてくるかどうかかわからないという問題。

問七 傍線部E「シャンソンの匂い」の「匂い」と置き換えられる言葉として最も適切なものを①～④から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① 風潮 ② 特徴 ③ 熟成 ④ 超克

問八 空欄 d に当てはまる最も適切な一文を①～④から一つ選び、番号をマークしなさい。

- ① 多くの日本人はシャンソンをフランス語で歌い、そして聴くことを選択した。
② 多くの日本人はシャンソンをフランス語で歌い、そして日本語で聴くことを選択した。
③ 多くの日本人はシャンソンを日本語で歌い、そして聴くことを選択した。
④ 多くの日本人はシャンソンを日本語で歌い、そしてフランス語で聴くことを選択した。

問九 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

イ 二〇二一年に開催された東京オリンピックの閉会式では、シャンソンの名曲「愛の賛歌」が、日本の若手のミュージシャンによって日本語とフランス語の両方の歌詞で歌われたため、パブル景気の崩壊以降のシャンソン不遇の時代に終止符が打たれたことが広く知れ渡ることになった。

ロ 日本のシャンソンの祭典と呼ばれている「パリ祭」において、以前はシャンソンを専門とする歌手がステージに上がって歌を披露していたが、昨今の同祭においては、演歌やロック等を専門とする歌手たちが、自らの専門領域を超えて歌うことが慣例化してしまっている。

ハ 美輪明宏はその歌手活動の中で、日本語でシャンソンを自然に歌うことの難しさについて悟り、日本人にはフランス人のように母国語のシャンソンを歌うことができないという理由で、自らのコンサートでシャンソンを歌うことをやめ、演歌歌手としてステージに立っている。

ニ 多くのヒット曲を生み出した作曲家の中村八大は、シャンソン喫茶の常連で、シャンソンに深い愛着と造詣を持ち、彼が生み出した「遠くへ行きたい」、「こんにちは赤ちゃん」といった歌謡曲は、シャンソンとしてシャンソンの祖国であるフランスでもレコードが発売された。

【問題二】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

現代の私たちの社会が「異常」なものに対して向けていく関心の強さは、それ自体すでに十分、異常な現象といふにあたらない。さまざまな異常な現象が今日のように赤裸々に報道され、過大に取り扱われて、センセーショナルな好奇心をおおった時代は、過去には例を見ないのではあるまいか。天候の異変、地震や津波、⁽¹⁾悪シツの流行、政治的・経済的な激動などのように、直接に私たち一人一人の生命や生活に影響を及ぼす異常事態に対して大きな関心が向けられることは、さして不思議なことではない。しかし、遠い外国の奇妙な風俗や習慣、テレビの「びっくりショウ」のたぐいに出てくる例外的な能力の持主、印刷ミスで番号の抜けた紙幣など、私たちの実生活には直接なんのかわりもない「異常」のわずかながら、私たちにとってたいへんに大きな好奇心のまもととなっている。スポーツの新記録や政治家の汚職が大きく報道されることは当然としても、連続何時間キスを続けた記録とか有名女優の私生活上のスキヤンダルとかがマスコミの恰好のタイトルになっている現象は、まさに現代的である。

もちろん、このような現象の裏には、いわゆる「情報過剰」というこれまたすぐれて現代的な徴候が、その原因の一つとして作用しているだろう。しかし、情報を求める要求の存在しないところでは、情報はなんの価値をも持ちえない。この「情報過剰」という現象それ自体が、考えかたによっては、異常なもの、例外的なもの、珍奇なものに対する現代社会の過大な好奇心の産物とみなしうるかもしれないのである。

満腹しきっているときには、私たちは食物に対してあまり関心を示さない。欲求は欠乏の函数である。現代の社会が異常な現象に対してこれほどまでに強い関心を示すということは、私たちがなんらかの意味で異常に飢えていることを意味しているのではなからうか。「現代は異常の時代だ」といういい方が一般になされているようであるし、確かにそうに違いないのではあるけれども、その反面において、逆に現代の社会は「正常すぎる」ために異常を求めているのかもしれないのである。現代の社会というのは、正常さによって身動きがとれなくなると、窒息しかかっている社会なのではないだろうか。ある意味では異常が少なすぎるために、その反作用で異常を求める傾向が過度に表面化して、「異常の時代」という外観を呈しているのだという見方もできるかもしれないのである。

異常なできごととは、すべて規則性、法則性からの逸脱であり、プロバビリティ（ありそうなきが起る可能性）あるいは予測可能性からはずれた偶然な⁽²⁾しわざとみることができる。ある偶然の生じうる可能性が低ければ低いほど、つまりその偶然を排除するプロバビリティが高ければ高いほど、それだけその偶然の異常度は増加する。その意味で、現代の私たちの社会は規則性をはずれた例外的な事態がだんだん起こりにくくなるような傾向をもった、つまり極めて高いプロバビリティによって支配された社会だといふことができる。

社会におけるプロバビリティの増大は、科学的知識の増加に比例する。科学技術の進歩によって、現実が起こってくるあらゆる事柄についてその規則性が精密に確定され、それに基づいて今後起こりうべき事態のプロバビリティが正確に予測されるようになると、その予想どおりに起こってきた事態は、い

かにそれが頻度の上からは稀なことであろうとも、もはや異常とはいわれえなくなる。その一例が日蝕である。かつてはこの上なく異常で不気味な現象として、おそらくは大きな呪術的な意味を帯びていたであろうところの日蝕も、現在では原理上は無限の未来にまでもわたって正確に予知可能となり、小学生の教材として利用されるまでにその異常さを失ってしまった。また、最近大きな関心を集めている「バイオリズム」の説によれば、人生において遭遇するいつさいのできごとが、その人の出生に関する種々のデータから高い精度で算出できるといふ。

このようにして、科学に対する信仰あつき現代においては、一見偶然と思われるできごとすべて、科学の進歩が、だそこまでは及んでいないためにそう見えるだけであって、科学がもっと進歩した a にはもはや偶然とはいえなくなるに相違ないというように考えられている。科学の進歩は原理上無限と考えられるから、真の偶然というようなものは原理上存在しえないということになる。こうして「異常」のはいり込む余地がますます狭まってきている現代だからこそ、現代の社会は、いわば異常に対する飢えから、異常な現象に対しても貪欲な関心を示すのではあるまいか。

しかし、異常な事態に対して私たちが示す大きな関心は、単にこのような異常への欲求だけから説明しつくされるものではないだろう。単なる欲求から生じるものは直接的な行動であって、多少なりとも意識化された関心ではない。意識化された関心が成立しうるための条件は、欲求がみずからと反対の方向性を持つ一つの傾向とぶつかって、そのために行動化が抑止されるということである。しかもこの傾向というのは、単純に行動を阻止する反対力や、行動を増強することによって突破できるような外的な抵抗のようなものであってはならない。欲求と出遭うことによってそこに意識化された関心を生み出しうるような反対傾向とは、あくまでこの欲求自身と同レベルにあって、欲求の「こまこま」においてこれと拮抗しうるような内的な抵抗でなくてはならない。つまりそれは、欲求が行動に移されてはじめてそこで遭遇する しょうごうぶつ 障物物ではなくて、欲求が欲求として働きつつあるそのあらゆる瞬間に——換言すれば欲求が欲求として働くというまさにその働きの自体において——欲求にさからうものでなくてはならないのである。

私たちの社会が異常な事態に対して示す大きな欲求に、内的に拮抗している反対力とは、要するに異常に対する不安である。異常への欲求は、それが欲求として発生するその最初の瞬間に、すでにそれ自身の内部において、異常への不安という逆の力に出会うことになる。その結果、この異常への欲求は「怖いもの見たさ」という屈折した性質を帯びてくる。私たちの心の中にある異常への関心は、例外なくこの「怖いもの見たさ」という性格を有しているといえそうである。

この不安は、科学的に確定される規則性とこれに対する信頼に基礎を置いた合理性とによってその機能を保障されている現代の社会にとっては、さしあたりは自己自身の存立にとつての脅威であるような例外性と非合理性性とに向けられた不安という形をとって現われてくる。たしかに、一個の例外を許容するということはその規則性の秩序全体の存立を危くするだけの意味をもつ。もちろん、精密な物理学の実験のような場合にも、例外的な結果の生じることはあるだろう。しかし、この例外がそれ自体、たとえば十分に事情の解明される操作上のミスによるものというような形で、再び規則性と合理性との中につつま込まれるような場合には、そこにならぬ不安も生じない。これに反して、(2) 感コウするはずのない印画紙になにかの形が写っていたりして、

その原因がどうしても解明できないような場合には、そこに大きな不安が起る。要するに、異常で例外的な事態が不安をひきおこすのは、安らかに正常性の地位に君臨しているはずの規則性と合理性とが、この例外的事態を十分に自己の支配下におさめえないような場合が生じたときである。つまりその例外が、合理性とは、理的に、相容れない、合理化への道が D、T、T、T アプリオリに閉ざされた非合理の姿で現われる場合である。このような原理的・本質的な、アプリオリな非合理が——つまり、合理化の未完成ではなくて合理化が絶対的に不可能であるような非合理が——いやしくも存在するということは、その合理性が完全な意味での合理性ではなく、それ自体合理性に反するような欠陥を含んでいるということの意味する。この致命的な欠陥が私たちに不安にするのである。

そこで、現代という時代が科学の名のもとに絶対的な信仰を捧げている合理性が、はたしてそのような欠陥を含みぬ完全な合理性でありうるのかということが、あらためて問なおされなくてはならないことになろう。科学とは、私たち人間が自然を支配しようとする意志から生まれできたものである。それはいわば、自分自身もとをたどれば自然の一部にすぎなかつたはずの私たちが、みずからを自然からひき離し、自然の頭上に舞い上ってこれをはるか上方から支配し、操作しようとする傲慢な意志の産物であった。そして、この支配を合法化し、これに絶対的な権限を与えるために、私たちの頭脳が作り上げた非常大権ともいふべき律法が、ほかならぬ合理性なのである。

ここで、自然そのものには、すくなくともそれが人間の野心によって征服される以前においては、いわゆる「合理性」のひとつかけらすら備わっていないかっただのたということ、いくら強調しても強調しすぎることはいないだろう。自然が今のように合理的・法則的な外観を呈しているのは、それが人間の支配のもとに屈服しているかぎりでのことなのである。合理性という名の律法による圧政のもとにおかれた自然は、それ自身合理的にふるまうよりほかなかつたのである。

その際に人間の頭脳のとつた巧妙な支配技術は特筆するに値する。人間はまず、自然それ自身が外見上示している周期性に眼をつけた。太陽はほぼ一定の周期をもって運行するし、動物も植物も、そして人間自身も、この周期とかならず一致した関係を保ちながらきまつた状態を反復する。自然をさらに微細に観察しても、やはり同じような周期性と反復性がすみずみまで行きわたっているように思われる。これらの周期性と反復性を一定の体系の枠の中に拾い集めて編み出したもの、それが「合理性」といわれる組織にはかならない。自然は、みずからの姿にあわせて人間が仕立ててくれたこの囚衣をこぼはすがなかつた。自然は人間の巧妙な むす 籠牢にかかつたのである。この身にびつたりと合う囚衣を着せられて、自然は無邪気に満足し、この合理性の着衣を誇りにすら思うようになった。自然は人間に対して忠誠を誓い、人間に対して喜々としてその合理性の姿を示し、ついには人間も自然もともどもに、自然とは合理性の別名であるかのような錯覚におちいつてしまった。

ところが、自然自身すらとうの昔に忘れ去ってしまったかに見える自然の本性は、実は合理性とはなんのかかわりもないもの、むしろ非合理そのものなのだった。第一、自然が存在すること自体が非合理以外のなものでもない。自然は、あるいはこの宇宙は、存在する必要もなしに存在しているに

すぎない。太陽の運行は確かに規則的である。しかし、太陽が存在するということが、それが運行しているということ、さらには人間を支えているこの地球が存在し、太陽との規則的關係において運行しているということ、地球上にそもそも生命なるものが存在するということが、これらはすべていつさいの規則性を超越した大いなる偶然である。そして、それは偶然である限りにおいて、合理性とは真正面から対立するものである。

この大いなる偶然性・非合理性こそは自然の真相であり、その本性である。それが人間の眼に見せている規則性や合理性は単なる表面的な仮構にすぎない。真の自然とはどこまでも奥深いものである。自然の真の秘密は私たちの頭脳でははかり知ることができない。そのような自然は科学の手によって支配しようと企てたのである。そして、自然の上に合理性の網の目をはりめぐらせて、一応の安心感を抱いて、その上に文明という虚構を築きあげたのである。

現代の科学信仰をささえている「自然の合法則性」がこのような虚構にすぎないとしたら、その上に基礎をおくいつさいの合理性はみごと**b**だということになってしまう。そのような合理的の世界観は、それがいかにもみずからのケン固さを妄信しようとも、意識の底においてはつねに、みずからの圧殺した自然本来の非合理性の痛恨の声を聞いているに違いない。それだからこそこの合理的の世界観は、いっそ必死になってみずからの正統性を主張するのである。それはあたかも、主権の篡奪者が自己の系譜を贗造して神聖化し、その地位を安泰にしようとする努力にも似ている。その裏で、彼はつねにみずからの抹殺したさきの主権者の亡霊につきまとわれ、報フクを怖れてその一族を草の根をわけても根絶しにしようとするだろう。これは、現代の合理主義社会がいつさいの非合理性を許そうとしない警戒心と、あまりにも酷似してはいないだろうか。異常と非合理に対して現代社会の示すかくも大きな関心と不安とは、どうやら合理性が自己の犯罪を隠し、自己の支配権の虚構性をコ塗りしようとする努力の反面をなしているように思われるのである。

さまざまな異常の中でも、現代の社会がことに大きな関心と不安を向けているのは「精神の異常」に対してである。「精神の異常」は、けつしてある個人ひとりの中で、その人ひとりにとつての異常としては出現しない。それはつねに、その人と他の人びととの間の關係の異常として、つまり社会的対人關係の異常として現れてくる。ある人の「気が違った」ということは、さしあたっては、その人が特定のあるいは不特定の他人に対して示す行動がふつうではなくなったということである。だれにも迷惑をかけることなく、自分ひとりの孤独な世界の中へ閉じこもってしまうような種類の「異常者」もいるだろうけれども、そのような人でも、彼がいれば通常の意味での対人關係から欠落し、あるいはいわば一つの不在として対人關係の中に登場するという限りにおいて、關係の異常であることに変りはない。

このような場合には、自然現象の異常や政治経済の異常とはちがって、私たち「一般人」とともに私たちの社会を構成している人間が、その社会構成行為それぞれ体において異常性を示すのであるから、こういった異常が私たちに与える脅威と不安はそれだけ大きなものとならざるをえない。社会は、いわば自己の内面構造の安否にかかわる危機を感じるようになる。

木村敏、異常の構造、講談社

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|---------|------|------|------|------|
| (1) 悪シツ | ① 人質 | ② 過失 | ③ 執念 | ④ 疾走 |
| (2) 感コウ | ① 光速 | ② 拘泥 | ③ 思考 | ④ 精巧 |
| (3) ケン固 | ① 先賢 | ② 露頭 | ③ 堅持 | ④ 檢拳 |
| (4) 報フク | ① 起伏 | ② 反復 | ③ 副業 | ④ 複雎 |
| (5) コ塗 | ① 模糊 | ② 頑固 | ③ 故意 | ④ 枯渴 |

問二 傍線部A「まさに現代的である」の理由を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 現代の社会では、センセイショナルな事態が一人一人の生命や生活に影響を及ぼす異常事態をひきおこすことになるから。
- ② 遠い外国の奇妙な風習や習慣、テレビの「びつくりショウ」のたぐいに出てくる「異常」が日常となっているから。
- ③ 実生活とは直接なんのかわりもない「異常」に対して、大きな関心が向けられている異常な現象がまさに現代を象徴しているから。
- ④ 「異常」なものに対する私たちの関心が、「情報過剰」という現象として理解される現代社会の異常事態を惹起してしまったから。

問三 傍線部B「極めて高いプロバビリティによって支配された社会」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 予測可能性からはずれた偶然ないし椿事が多発する、異常な出来事が頻発するような社会、ということ。
- ② 偶然の生じる可能性を保証し、容認することで、異常な出来事を異常として捉えることのない社会、ということ。
- ③ 「異常の時代」としての現代社会は、「正常すぎる」社会という一面のある、「異常」に飢えている社会、ということ。
- ④ 規則性、法則性から逸脱する事態が起こりにくくなる、すなわち異常なできごとが起こりにくくなるような社会、ということ。

問四 空欄 a・b に当てはまる最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|------|----------|---------|-------|---------|
| 空欄 a | ① あかつき | ② 青天の霹靂 | ③ 大団円 | ④ 最果て |
| 空欄 b | ① 屋上屋を架す | ② 羊頭狗肉 | ③ 登龍門 | ④ 砂上の楼閣 |

問五 傍線部C「単なる欲求から生じるものは直接的な行動であって、多少なりとも意識化された関心ではない」の内容を説明したものと最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 科学的知識の増加に比例して、社会のプロパビリティが増加することによって人々の「偶然」による異常を求める要求が高まることで、偶然の異常が増加することになるが、これは実際の異常を過大評価した欺瞞の「関心」に過ぎない、ということ。
- ② 真の偶然というものが原理上存在しえない現代社会において、異常で不気味な現象に対して私たちが取りうる態度は、その異常を好奇心の産物として捉えることであって、それ以外では科学的な規則性や法則性からの逸脱ということになってしまふ、ということ。
- ③ 異常な事態に対して私たちは貪欲な関心を示すが、この場合の「関心」は「異常」への欲求によって生じた「行動」に過ぎず、その異常に対する不安という内面的抵抗によってその「行動」が抑止されるような意識化された「関心」とは異なる、ということ。
- ④ 異常への欲求という私たちの「関心」の在り方を分析すると、好奇心からの欲求としての「行動」が、その好奇心と同一レベルの外的抵抗と内的抵抗の関与によって抑止されることで、異常への「関心」として意識化される構造になっている、ということ。

問六 傍線部D「ア、ブ、リ、オ、リ」を言いかえる言葉として適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 形而上
- ② 先験的
- ③ 後天的
- ④ 演繹的

13

問七 傍線部E「この致命的な欠陥が私たちに不安にする」の内容を説明したものと最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 科学的に確定される規則性に対する信頼を基礎に置く合理性によってその機能を保証されている現代の社会において、一つの例外を許容してしまふと、その規則性の秩序全体の存立を危うくしてしまうという致命的な欠陥があるという事実が「不安」をひきおこす、ということ。
- ② 正常性を保証している規則性と合理性に対して、それらとは原理的に相容れない、それ自身が合理性に反するような非合理的姿で現れることで、合理性が完全な意味での合理性ではないという致命的な欠陥によって、異常で例外的な事態が「不安」をひきおこす、ということ。
- ③ そこに写るはずのない何かが生じたことを事実として認めてしまふと、写るはずがないという合理的な判断が否定されることとなり、写ることもあると合理的に認めざるを得なくなるため、「異常」を合理的に認めると、「不安」をひきおこす、ということ。
- ④ 現代という時代が科学の名のもとに絶対的な信仰を捧げている合理性は、理論的にその合理性を完全に備えるために「非合理性」を内包しなければならぬが、この構造は私たちの合理性の致命的な欠陥であると認識されることで「不安」をひきおこす、ということ。

問八 傍線部F「自然の合法則性」の内容を説明したものと不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「自然」の本性は、実は合理性とはなんのかわりもないものであって、むしろ非合理そのものである、ということ。
- ② 「自然」の存在は、その運行がいかに規則的であっても、その規則性を超越した「偶然」である限りにおいて非合理である、ということ。
- ③ 「自然」の真相は、大いなる偶然性・非合理性にあり、人間はそのような自然に対して科学で規則性や合理性を仮構したにすぎない、ということ。
- ④ 「自然」の非合理性は、現時点の科学の水準で説明することに限界があるため、表面的に手を加えて科学信仰をささげている、ということ。

問九 傍線部G「精神の異常」の内容を説明したものと最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① つねにその人と他の人びととの間の「関係の異常」として現れてくるもの、ということ。
- ② つねにある個人ひとりの中で、その人ひとりとしての「異常」として出現するもの、ということ。
- ③ 通常の意味での対人関係を維持しながら、自分ひとりの孤独な世界の中へ閉じこもってしまうような「異常」、ということ。
- ④ その人が他者との関係性とは無関係に、自己の精神的な内面において強い「不安」にとらわれるような「異常」、ということ。

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

- イ 現代の社会を、「異常」なものに対して「異常」な関心をもつ、まさに「異常の時代」だとする指摘はすでに有効ではない。
- ロ かつて「日蝕」は異常で不気味な現象として、呪術的な意味を帯びていたが、現在ではその異常さを失ってしまっているといえる。
- ハ 異常で例外的な事態は人々に「不安」を惹起するが、それはその例外的事態を規則性と合理性とでおさめることができない場合が生じたからであり、それは合理化が未完成であるからではなく、合理化が不可能な非合理が存在するということを意味している。
- ニ 現代社会は科学知識の増加によって極めて高いプロパビリティに支配された社会であるため、頻度の稀なもので「異常」とはいわれなくなってしまうが、「怖いもの見たさ」という人間の根源的で貪欲な関心によってむしろ「異常への欲求」は高まっているといえる。

14